

あほくさ、と母親は言った

片岡義男
(作家)



僕には母親がひとりいる。日常的な日本語では、産みの母、と言われている。英語ではバイオロジシカル・マザーと言うようだ。その産みの母は、育ての母、でもあった。あのひとりの女性が僕を産み、僕を育てた。そのころに間違いはない。僕は三十歳まで母親とおなじ家に住んでいた。

が、母親から受けた大きな影響です、とつまみ出して人に見せることが出来るような影響が、どこを探してもまったくない。これは不思議なことだ、と僕はずっと以前から思っている。僕は母親から、どのような影響を受けているのだろうか。母親は終生、関西弁の人だった。場合によっては東京の言葉を喋ろうとするのだが、幼い息子の僕が聞いても、

その東京言葉はどこか妙だった。こてこての、という言いかたがある。母親は、こてこての関西弁でとおした。小学生の僕が学校から通信簿をもらってきて、僕の成績は悪いですよ、と母親に言うへん、かまへん、かまへん、と母親は言っていた。通信簿を見た父兄は短い感想文を書くことになつてます、と僕が念を押すと、あほくさ、というひとりで母親はかたづけした。成績の悪い子供は補習授業に出るのです、という僕の言葉を母親は、やめとき、やめとき、と言ってはらいのけた。

この母親に対して、僕はごく幼い頃から、明らかに丁寧な東京言葉を常に喋った。なぜだろうか。母親にならつて関西弁の子供になつてもなんら不思議はない。しかし、そうはならなかった。母親の関西弁に対抗していたのだろうか。かまへん、あほくさ、やめとき、というような言葉そしてももの考へかたを、どこか深いところで、じつは僕は母親から受けついでいるのだら

うか。

日本が戦争をしていたアメリカ軍の激しい空爆を逃れて、僕は山口県の岩国へ移った。戦後は広島県の呉で過ごし、一九五三年に東京へ戻った。岩国でも呉でも、到着したその日から、僕は地元の言葉を喋った。瀬戸内にいたあいだずっと、方言を自在に操る陽に焼けた瀬戸内の子供だった。その僕が、母親に対してだけは、丁寧な東京言葉を喋った。なぜだったか。反面教師としての役割が大きかった母親に、幼いなりに僕は拮抗しようとしたのだろうか。

母親には口癖のように頻繁に使う言葉が、いくつもあつた。そのなかのひとつは、いまでも僕が忘れていない、読解力、というものだった。読んで理解する能力、というような意味で、いまでは使う人は少ないけれど、まだ立派に現役だ。読め、と母親はいつも言っていた。読むのは、本だ。本を読める、と母親は言っていた。読んで理解することが出来るようになったら、そ

のこの積み重なるのなかから、自分でも文章を書くことの能力が、いっさい無理することなく、やがてかならず生まれて来る、というのが母親の信念だったようだ。僕の母親は奈良女子高等師範学校というところを卒業して女学校の先生をしていた経歴を持つ。この経歴は、読解力の信念を、充分に裏づけていた。そのことは、子供の僕にも、よくわかった。だからと言って、身近にある本をかたづけしから読み、図書館や書店へ日参する子供に、僕はならなかった。

本を読め、と母親はしきりに言ってくれど、僕に読ませるための本をたくさん買い込む、というような人ではなかった。本は充分な量が常にあつたけれど、それらは僕のために買い整え用意したものではなかった。父親はハワイの二世で、日本語はほとんど理解しないし、しようとも思っていない、という人だった。だから彼から家庭へと持ち込まれる本その他は、英語のものだった。

僕は二十歳のときから自分の文章を書き始めた。ただちにそれは仕事となり、以後ずっとその仕事を続け、現在にいたっている。じつにさまざまな文章を書いた。ある時期は翻訳も試みた。現在は主として小説を書いている。小説と並行して、いま書いているようなエッセイも、数多く書く。仕事のための基本的な材料は、日本語だ。

なぜ書き始めたのですかという問いにいまならなんとか答えることが出来る。そのときどきの自分の必要に応じて、自分の言葉を探しそして選び、それらを自分の思考に出来るだけ近いところで使っていくためです、というような答えだ。まさに言葉の仕事ではないか。母親や父親が僕におよぼした影響力が、ここまで届いているとは、とうてい思えない。どこかずっと遠いところで、彼らの影響力は途絶えたのだと、僕は思う。両親がその子供におよぼす影響力として、これ以上の正解はない。

呪縛

山本千明

(英会話講師)



「ここ、見事なストリートネックですわね」昨年の秋、X線画像を指さす医師にそう告げられた。首から肩にかけて「悪霊が取り憑いた？」と思うほどの凝りと痛みが続いていたのはこのせいだったのか。「はい、今日からこの運動を続けてみてくださいね」と一枚のチラシを渡された。ポニーテールの可愛いお姉さんが両肩を垂直に上げたり下ろしたり、頭を左右に倒したり、の「肩こり体操」が幾つも紹介されている。

それから十日後、私はダンススタジオのソファに腰かけて「レッスンは学」をしていた。自慢じゃないが、ダンスは大の苦手である。もしも「見るのも嫌な砂肝を食べる」「人前で踊って見せる」のどちらかをヤレと言われたら、「砂肝」と答えたくなるほど私にとってダンスは「絶対無理！」なものだ。

思い起こせば、四十数年も前の中学校時代。厳しいことで有名な体育教師が私に向かって放った一言で「ダンス

は無理人生」が始まった。運動会で披露する「創作ダンス」の練習中、私の動きをじっと見ていた体育教師が突如叫んだ。「あなた！ 本当に、リズム感ないわねえ！」その無情に放たれた一本の矢が、それ以来ずっと胸に刺さったままなのだ。

(見るのも嫌な砂肝と違って)ダンスを見ること自体は好きなので、ミュージカルもストリートダンスもフラッシュモブにも「憧れ」はあった。ただ「踊れ」と言われると、あの「呪いの言葉」が心に絡みついてストップをかけるのだ。

なのに、何故にあなたは今「ダンススタジオ」にいるの？ と問われると、それは正にミルフィユのような偶然の重なりの結果だった。「たまたま」知り合った方が「たまたま」ダンスインストラクターで「たまたま」彼女のスタジオが我が家から車で三分という近さで、「たまたま」私が特に魅力を感じるヒップホップだったのだ。「いつでも気軽に寄ってね！」と誘っ

てくれたインストラクター、AKI先生のフレンドリーな笑顔にも心が動いた。ちょっとだけ覗いてみよう。家から近いし、という野次馬的な好奇心のみの「見学」だった。ところがそこで「たまたま」な決定打が一本。先生の動きと、あのポニーテイルのお姉さんのおススメの運動がドンピシャだったのだ。

「たまたま」も三つ以上重なったら、それは「偶然」ではなくて「運命」なんだ。というのが亡き兄の口癖だった。その「運命」とやらのボン！と背中を押され、「大丈夫！ 楽しめばいいの！」と明るく引っ張ってくれたAKI先生のおかげで、私は予期せぬ「ダンスデビュー」をすることになる。先生のご配慮で初心者中心の「大人女子クラス」ができたのもありがたかった。週一のレッスンに通い始めて六か月。壁一面の鏡に向かって「ハイ、行くよー！ ワン・ツウ・スリー・フォー！ 前！ 後ろ！」先生の軽快な動きに遅れまじ！ と必死に

付いて行こうとするが、一ステップどころか、三ステップくらい遅れ、しかも前後左右が見事に逆になっていく。同じ年代の生徒さん達からも「ん？」

「あれ？」という声が漏れ、同時に笑いと連帯感そして得も言われぬ安堵感が広がっていく。AKI先生は時々ちらつとこちらに向けて「なんか、その動きかわいいわね」と皆をフォローしてくださる。「はい、両手でバケツ持ち上げるように！」「ハイ！ ここで手は、五木〜ひろし〜」と具体的に大人女子たちにも非常に分かりやすい。

還暦の私よりも、ちょっぴりお姉様のAKI先生だが、スリムなお姿にラメ付きの黒いTシャツ&黒いパンツがお似合いのクールビューティーだ。動きもキレッキレでカッコイイ。その後ろで真似する私はぎこちない動きのままで息の方がキレッキレになってくる。それでも、「うんうん、そんな感じ！」「いいね〜キマッテル！」と励まされつつ踊っているうちに、体の奥からじんわりと汗が出てきて何だか

とっても気持ちがいい。ノリノリのヒップホップや懐かしのディスコサウンドにロックまで、体が自然にリズムを刻みたくなる曲が次々と流れ、やたらとハッピーな気分になっていく。

ちよくちよくポトルウォーターを飲みながら踊り続けて四十五分。残り十五分はマットの上で静かにゆっくりストレッチタイム。「ふう〜」と大きな深呼吸を最後に一時間のレッスンが終わると、肩も体も、ついでに気持ちまでもが明らかに軽くなっている。何で今まで、こんなに楽しくて体に良いことを避けてきたのか。私に「呪い」をかけた体育教師にヒトコト、モノ申したい気もするが、それよりも先ず「踊る喜び」を教えてくださいAKI先生に御礼申し上げます。

最近ダンスを始めた、と言うと「そうなんだ。フォークダンス？ フラダンス？」と必ず訊かれるので「ヒップホップ！」とドヤ顔で答えると、もれなくビックリされるのも何だか愉快だ。

ミノムシの糸



宮本 富夫

(高松大学 名誉教授)

「ちょっと来て！」、子どもと夕方の散歩に出かけた長男の声。何かを見つけたらしい。足早にその場へ出向くと、小さなミノが地上約一メートルの高さで風にゆらゆら。川を挟んだ隣の家の二階の軒下に引き込まれ、一階の軒下に伸びる電力の導入線から一筋の糸でぶら下がっている。「これ何？」「ミノムシだと思っよ」。ミノに笹の葉を織り込んであるせいか、笹の葉が一葉、空中で揺れているように見える。

確かに、ミノムシ（オオミノガ）がつくるミノとはとても見えない。小枝を何本かくっつけ、その昔ごく普通に見つかった少し大きめのミノ。このイ

メージが頭にあると、「これは何だろう」と思うだろうなど納得する。笹の葉を縦長にくっつけ、枯れ葉そのもの。近くで見つかる材料を使ったのだろうが、いいカモフラージュとなっている。これなら餌として狙われにくいかもしれない。ゆらゆらすると、人の目に不思議なものと思える。このミノムシはシバミノガの幼虫らしい。

オオミノガの幼虫は、見かけにくくなって久しい。大陸由来の寄生バエにやられ続けているらしい。理科の時間に、このミノムシのミノの端を切り、ミノムシが糸を吐きながら切り口を修復する様子を観察したのがミノムシとの出合い。切り口から顔を覗かせた幼

虫の愛嬌のある頭部、少しずつ少しずつ切り口を修復していく動きの健気さに心動かされたこと、ミノが予想以上に丈夫であったこと、懐かしく思い出す。

見ていると、ほんの少しずつであるが、ミノが上に向かって動いている。どのような工夫をして糸で吊り下げられているミノと体を重力に逆らって移動させているのだろうか。よく見ると、幼虫が体の前の部分をミノから出したり入れたり。その度に糸が少しづつ手繰り寄せられ、ミノが上へ向かって動く。家であるミノを背負い、風にゆらゆら揺られる中で作業、さぞかし大変だろうと想像する。もくもくと作業は続く。休んでいる様子はない。何かを食べている様子もない。緊急事態なのだろうか。クモが糸にぶら下がっているのはよく見かけるが、このようなミノムシの動きを見るのは、私をはじめで。クモのようにスルスルと滑るような移動ではない。まさにヨイシヨ、ヨイシヨ。長男、家内、そし

て私と、三人がしばしの観察を楽しむ。何のために、どうして、どこへ向かうなど、あれこれ想像を巡らせ、それぞれが思いをときおり口にする。糸を出し、ぶら下がることで新しい居場所を探していたのだろうか。移動しているとき、何かのはずみに足を滑らせ、糸を出して難を逃れ、元の場所に戻ろうとしているのだろうか、想像は膨らむ。散歩を中断された一歳七ヶ月の子どもも霧囲気にもまれたらしい。ミノムシが見えているのか、見えていないのか、不満の様子は無い。大人たちの言葉のやり取りを、神妙に聞いている。一階の軒下まで移動するにはかなり時間がかかるだろう。「あとで」と、観察を中断する。

翌朝、ふと昨日のミノムシのことを思い出す。どうしているのかなと昨日の場所へ。一階の軒下付近には見つからない。どこへ行ったのだろうか。ふと見上げると、二階の軒下の電力導入線を電柱方向に脚を使って移動しているミノムシが見つかる。一晩かけて、

地上付近から二階まで移動したらしい。餌も取らずに、ひたすら導入線を上へ向かって。その移動距離に、ただ驚く。よく見ると、導入線は黒と緑と青の三本立て仕様。ミノムシはなぜか黒の線を避け、移動している。黒は嫌なのだろうか。色を認識することができるのだろうか。夏の朝日を浴びた導入線はどれもそれなりに熱くなる。青や緑の方が黒よりも熱くないのだろうか。どれほどの温度差があるのかはわからないが、この違いを感知しているのだろうか。感度のいい温度センサーを備えているのだろうか。あるとしたら、そのセンサーは足裏にあるのだろうか。頭部にあるのだろうか。いろいろ、想像が頭をめぐる。ミノムシは一

途に黒の線を避け、移動している。気の毒なことに、黒の線を避けて移動を続けるミノムシの前方に導入線をおおう長さ約一メートルの黒のカバー。どうするのだろうかと見ていると、そのカバーの端でゆっくりと方向転換。元来た方向へ引き返し始める。

当然であるように青や緑の線の上を、途中から青の線の上を二階の軒下方向へ進んでいる。軒下に至るには、時間がかかるだろうと、その場を離れる。少し時をおき、戻ってみると、ミノムシの姿はなかった。軒下のどこかで休んでいるのだろうか。

ミノムシが自分の出す糸を使ってミノと体を支える、クモのように糸を使って垂直移動ができる、糸を伸ばし居場所探らしいことを行う、温度差を感知し、より低い温度のものを選んでいるらしい、そして何よりも糸がかなり丈夫であるらしい。ミノムシについてあらたに学ぶことができ、野生の動物が備え持つ生きる能と術に心動かされた。ミノムシの糸に注目した研究によると、ミノムシの糸はオニグモのそれより優れているという。素材がタンパク質であるから、使用後の廃棄に問題を起こしにくいということで、この糸を用いた繊維の開発が進められているという。

ちよつと変わったオーストリアの温泉

さかもと ふさ

(型絵染版画家、エディター)
イラストレーター

ウィーンから南に百五十キロメートルほど離れたシュタイヤーマルク州にあるバード・ブルマウにオーストリアのアーティストで、建築家で、日本ともゆかりのあるフンデルトバッサーが設計した温泉施設ログナー・バード・ブルマウがある。人と自然と建物の融合を目指したフンデルトバッサー、周囲は山と緑に囲まれた中にカラフルな色彩と、積み木を並べたようなリズムカルで、曲線を多用した外観、ユニークなデザインの建物は壮観である。メルヘンチックな世界だ。建物内も無機質な直線を嫌った彼の理念に基づき、タイルを貼ったように暖かみのある色鮮やかな壁面、曲線を多用している。廊下もなだらかなスロープになっている。

オーストリアの温泉の温度は三十六度くらい、水着着用である。我々日本人には水風呂だ。だから私は温泉にはいる気がおこらないのである。オーストリア人の体温は低い為に、こんなエピソードがある。オーストリア人と結婚した日本人女性ご主人様のために風呂桶にお湯を張って、ご主人に入っていたのだ、ところが風呂場から私を殺すきかとなったそうだ。日本人の用意した風呂の湯は彼にとつて、熱すぎたのだ。ちなみにバード・ブルマウは世界温泉遺産である。



マルクスの不倫（下）



池田 一 貴

九

東啓大学文学部准教授・小池南冥みなみは、婚約者で画家の里美しのと二人で新宿の喫茶店カフェにいて、極左（過激派）組織・中革派の大幹部、中山清秋を待っている。この日、大教室での講義が終わった直後、今日会いたいと中山から誘いがあったからである。

「それってクイズなの？ 哲学者と詩人と政治家の三つから、生涯の仕事の一つ選べって」

「クイズじゃないわよ。ま、性格診断の一種かな。血液型性格判断みたいなの」

「ふーん。あ、そうか。俺もわかったぞ」

「なにが？ クイズの意味？ それとも自分が選ぶべき仕事はどれか、ってこと？」

「両方だよ。まず、俺が選ぶのは詩人だな」

「えー、哲学や思想を教えているくせに？」

「心の底ではロマンチストなのさ。三つの仕事は、知・情・意のどれを重視するかを判定するための三区分だね。哲学者は知、詩人は情、政治家は意を表してらんだろ？」

「正解。さすがね。でも詩人なの？」

「願望だよ願望。好みの科目が得意科目とは限らないだろ？」

「はあ、そういうことか」

「マルクスだって若いころは詩を書いていたけど、詩人の才能はなかった。遠い親戚にあたるハインスは、正真正銘の詩人だったけどね」

しのが、この席って落ち着かないわね、ウェイトレスがしょっちゅう行き来するし……と不満を漏らすと、小池はニヤリと笑って答えた。

「中山さんは今でも敵対する党派から命を狙われている。だから、喫茶店は必ず、正面とは別に裏口のある店を選ぶし、敵に襲われたら、すぐに調理場から裏口へ逃げられる席をとる。それも正面入口を斜めに見る席が、最適らしい。そんな条件にびたりなのは、この店ではここだ」

しのは驚いて声もない。そんな危ない思いをしてまで外出しなくてもいいだろうに、と言いたそうである。

「今日のように外が明るいうちは、まだ危険度が少ない。それに中山さんが動くとき、昼間なら必ず警視庁公安一課の私服刑事が二人尾行につく。だから敵に襲われる確率は低いぞうだ」

「えー、刑事が護衛してるようなものなの？」

「いや、中山さんに言わせると、自分が刑事の目の前で襲われても、公安の刑事は傍観しているだけだろう、と笑っていたよ」

「そんなあ、たとえ極悪人でも、その人が殺さ

れそうになったら助けるのが刑事、いや警察官の仕事でしょう？」

「普通はね。でも、公安部の刑事はそうじゃない。一般の警察官や捜査一課、捜査二課などの刑事部の刑事は、国民一人ひとりの生命・財産を守る。しかし、公安部が守るのは国民個人ではなく、国家・社会そのものだ。つまり、そのために個人が犠牲になってもしかたがない、というのが基本的な考え方だ。だから、中山さんの死を傍観する可能性もあるってことさ」

「し、信じられない……」

十

中山清秋が正面のドアから入ってきた。

「いま、中山さんが入ってきたから、あまりロジロ見ないで帰ってくれ」

しのは、わかった、と答えて席を立ったが、中山が連れてきた女性を見て「あっ」と声をあげ、立ちすくんだ。

「あなたは……哲学者……」

その女性は授業中、しのに三者択一のクイズを出した女子学生だったのである。女子学生自身は哲学者を選択した。

「さきほどはどうも。授業中に話しかけて、ご

めんなさいね。私、岡田マリです。小池先生には教室移動中に自己紹介しましたよね」

「あ、はい。もちろん覚えていますよ。しかし、中山さん、岡田さんとはどういう関係で……」

「恋人どうしに見えるかね？」

「まさか……」

「いやね、じいじ。先生にはちゃんと本当のことを話してよ」

「じ、じいじ？……な、中山さん」

「この子は、わしの娘の娘、つまり孫だよ」

「えーっ」

中山が来たら、音もなく帰るはずだった里美しのは、帰るに帰れなくなってしまった。

「小池くん、わしはそちらの席のほうが都合がいい。替わってくれんか」

中山が正面入口の見える席を所望したので、小池は素直に席を譲った。この喫茶店では中山の定位置である。小池はしかたなく里美しのを二人に紹介した。婚約者とは言わず、友人として。

ふいに中山が言う。

「いま入店してきた男二人は公安だ。よっ」

中山は軽く右手をあげた。年配の刑事だけがそれに応えて、軽く手をあげた。親しくはないが顔

なじみ、といった感じの互いの応答である。

「小池くん、今日のあなたの講義はおもしろかった。で、少々質問したいことがあったので、ここに呼び出したというわけだ」

「え、講義を聴いていたんですか。教室で？」

「いや、ボイスレコーダーで録った声を、同時に電波で飛ばす方式らしい。詳しい方法は知らないが、うちの技術班にとつては容易い仕組みだと聞いた。もちろん、教室であんたの声を録ったのはこの孫だが」

「はあ……無断でそういうことをされては困りますね。下手をすれば言論弾圧につながりかねない。部外者でも私は聴講を認めています。講義内容の無断録音と拡散は問題です。とくに学生の勉強という目的以外の二次使用は禁じています。以後、おやめください」

「そう硬いことを言いなさんな」

「いいえ。中山さんも政治に携わる人間なら、自由な言論が脅かされることを問題にしたことはあるでしょう。国家権力が言論を盗聴し弾圧するのは許せないが、民間の政治団体なら許されるという理屈は成り立たない」

「わかった、わかった。事前に断らなかつたことは謝る。しかし理解してほしい。わしがこの

「教室に向いたら、おたくの大学にも革プロ派がいるから、教室が修羅場になる可能性もある。それを避けるために……」

「わかりました。次からは事前に私に了解を求めてください。もちろん二次使用は禁止です」

中山清秋は無言で頷いた。岡田マリも、勝手なことをしてすみません、と謝罪した。

十一

「で、質問だがね、マルクスの不倫の相手は、ヘレーネ・テムートだけだったのか、それとも他にもいたのか……と」

中山の関心事もそこにあったか、と小池はなぜか微笑ましくなった。

「いた、と思いますが、明確な証拠は残っていません。その意味では証拠不十分で、推定無罪ということになるでしょうね」

「やはりそうか」

「というと、何か心当たりでも？」

「うん。別のメイドが死んだ件でね」

「ああ、その件をご存じでしたか」

小池南冥は授業では触れなかったが、喉元まで出掛かっている話があった。マルクス家のメイド死亡事件である。ヘレーネの出産から十年ほど後

の話だが、ヘレーネの異母妹でマリアンネという若い女性が、やはりメイドとしてマルクス家に加わった。彼女が突然死したのである。

マルクスの女性関係に厳しい目を向けたある著書は、この突然死を「墮胎の失敗の結果」と推測している。父親はマルクスであった、と。

十九世紀半ばの当時、医学はまだ発達しておらず、妊娠中絶には危険が付きまとった。ある種の毒性物質を飲用することで墮胎をはかったからである。吐剤、催眠剤、キニーネ、水銀、火薬とジンを調査した服用剤……等々、仮に中絶に成功したとしても妊婦の健康を損なう恐れが強かった。場合によっては死に至ることも。

同時代（江戸後期）の日本では、墮胎は「中絶流」と呼ばれ、怪しげな医者の中絶に手を貸した。当時は医者に国家資格のようなものはなく、自称医者でも営業できたのである。中絶で妊婦が健康を損ない、または死に至る場合があったことは英国と変わらない。いや、正常な分娩でも、産後の肥立ちが悪ければ命を落とす場合があったのだから、女性にとつて妊娠・出産・中絶は命がけの仕事だったといつてよい。

ヘレーネが妊娠・出産したとき、マルクスと妻イエニーとの関係が険悪になり、ギクシャクし、

妻は鬱状態におちいった。もし再びマリアンネの妊娠が発覚したら、今度こそ夫婦関係は破局を迎えたかもしれない。だからマリアンネに対しては、マルクスが必死に墮胎を勧めた（というより命令した）可能性が大である。その結果がメイドの突然死だとしたら、マルクスの罪は深い。

しかし、明確な証拠はないのである。

小池の説明に、中山は満足そうに頷いた。

「さすが学者先生だね。話が公平というか客観的だ。マルクスを貶めることだけを目的としていない、つてことがわかるよ」

「でもね、中山さん、勧善懲悪じゃないけど、マルクスも結局、罰を受けたんじゃないかな。妻イエニーが早死にしたことと、子供たちがみんな不幸な死に方をしたことも、マルクスが受けた罰だったような気がします」

「そうかい」

妻イエニーの兄弟はみな長生きしているし、両親も老衰で死去しているから、病気に弱い家系ではなかった。しかしイエニーは、マルクスの不倫が発覚して以来、ひどい精神的衰弱状態になり、心のバランスを崩したように見える。因果関係は証明できないが、そんな夫婦の危機のなかで幼い子らが次々と夭折していった。

一八五一年三月に生まれた三女フランツィスカは、その翌年、わずか一歳で亡くなった。貧困のため幼児用の棺桶をすぐには購入することもできない状態だった。母イエニーは「天使の遺体」が柩もなく床に横たわっているのを嘆き悲しんだ。一八五一年六月にはメイドのヘレーネ・デムトが、マルクスの不倫の息子フレディを生んでいる。当時のことを、妻イエニーは政治的配慮をにじませながら、こう書いている。

「一八五一年初夏には、またひとつの事件が起こった。そのため内外の憂慮はいよいよ増すばかりだった。これについては詳しく触れようとは思わない」と。

筆にするだに心乱れる事件だったことが窺われる。同時に、詳細を書き残せば、これまでの苦勞が水泡に帰すような破廉恥事件であったことも、彼女は知っていた。精神は激流に溺れ、鬱に沈む冥海をさまよっていたのである。

じつは、マルクスの不倫またはその可能性は、ほかにも数件あった。

十二

不倫の兆候は結婚の前までさかのぼる。結婚前なら、マルクスが他の女性と関係があったとし

でも「浮気・不倫」とは呼ばまい、というのが常識的な見方だろうが、マルクスとイエニーはすでに結婚の約束を交わし、親の反対でまだ正式な葬式をしていないだけの状態だったから、倫理的には相手を裏切つてはいけな関係にあった。

にもかかわらず、マルクスは、年上の人妻と怪しいピクニックに出かけたりしていたのである。相手の名はベッティーナ・フォン・アルニム、やはり貴族である。イエニーは嫉妬していた。

ほかに結婚後、名前がわかつているだけでも、テング夫人、さらに姪のナネットとの関係も疑われている。年上女性（妻も四歳年上）との関係だけでなく、正反対のロリータ好みという指摘もある。しかしそうなると、年齢に関係なくただの色情狂だったということになりかねない。どうも、これらは有名税のひとつなのだろう。

妻イエニーは四十代で天然痘を患い、美しい顔に病気の跡、いくつもの癍痕（あばた）を残した。夫の不倫を疑う妻にとっては被害妄想を募らせる病跡ともなったであろう。

鬱が原因かどうかはわからないが、イエニーは肝臓を患い、肝臓となつて六十七歳で死去した。短命とまではいえないが、病気に強く八十歳近くまで生きた人の多いヴェストファーレン家の家系

では、早死にだったといえるだろう。

マルクスは悲嘆にくれた。なに不自由ない貴族のお嬢さんを、質屋通いの貧乏生活へと導き、あまつさえ不倫で苦しめてしまったことを、マルクスは後悔した。いや、後悔したと、ぼくは思いたいですね、と小池南冥は中山清秋にいった。

「きみも、けっこうセンチメンタルだね」というのが中山の答えだった。「マルクスはそんなに甘くない。けっこう冷酷だよ。無実の人間を『血の粛清』で殺すぐらいの太い神経を持っていないれば革命なんて実現できない。レーニン、トロツキー、スターリン、みんなそうさ。マルクスはその元祖だ。妻を悲しませたことなんか、小さなエピソードのひとつにすぎない」

これを聞いた小池は、厳しい目で中山を睨み、「共産主義者つて、みんなそうなんですか。残念ですね」と言った。

「みんなかどうかは知らん。しかし革命の歴史を見れば、罪もない一般人民が革命本隊に殺されているのは事実だ。例外はない。革命家は一般大衆を煽り、利用し、信用させるが、邪魔になった一部人民は必ず消されている。殺されているんだ。人民のためと叫びながら人民を殺す。それが革命さ。おれもこの歳になつて、やっと理解した

のだ。しかしもう、変わりようがない」

彼の手は、敵とする他党派の活動家の血にまみれている。しかもすでに七十代後半の後期高齢者である。今さら改心して罪を詫び、刑に服すこともできない。あと何年生きられるか、彼自身にもわからないのだ。

「マルクスには、妻子を愛する男性という側面のほかに、情熱的かつ冷酷な革命家という側面もあったでしょうね。もちろん、資本主義社会のメカニズムを解明する学者という側面もありましたし、さらに不倫に走る好色漢という側面もあったでしょう。どれか一つをとらえて『これがマルクスだ』とは言えないでしょうが、中山さんは革命家マルクスが好きなんですか」

「いや、一番嫌いだね。むしろ、好色漢マルクスが一番人間くさくて好きだよ」

意外な返答に、小池はしのと顔を見合わせた。ちようど、その瞬間である。

「逃げろ！」という叫びが上があった。声の方向を見ると、公安の刑事がイスから立ち上がって、大きく腕を振っている。中山を振り返ると、すでに孫の手を引いて調理場へ駆け込んでいた。八十歳近い老人とは思えない迅速なスピードである。

「ケッ、ド素人が！」という声が耳に残っている

るが、それは中山が席を立つ瞬間に、吐き捨てるように漏らした言葉だった。

そのド素人が三人、ヘルメットに鉄パイプで武装して正面入口から駆け込んできた。逃げた中山を追って調理場へ殺到した。皿やカップなど食器が割れるけたたましい音が店内に響き渡り、客席は騒然とした。公安の刑事二人が駆け寄ってきて「ケガはありませんか」と小池に問うた。小池は「大丈夫です」と答える。

「あれは何ですか。内ゲバですか」という小池の問いには何も答えず、公安の刑事は調理場へ入っていく。中山も岡田も、武装した三人組も、すでに裏口から消え去った後である。

刑事が戻ってきて言う。

「気をつけてお帰りください。できたら、タクシーで。まだ仲間がいるかもしれません」

「そのつもりです」と答えた。事情聴取も何もないので拍子抜けしたが、すぐに（ああ、全部聴かれていたのか……）と悟った。

（完）

(表紙説明)

■豊稔池堰堤(ほうねんいけえんてい)

雨が少なく、水不足に苦しんでいた観音寺市大野原町の農家の声を受け、昭和初期に造られたダム。日本唯一の石積み式マルチプルアーチダムであり、中世ヨーロッパの城塞を思わせる風格がある。

五郷地区公民館

所在地／〒七六九一―一六二二

香川県観音寺市大野原町

五郷井関六九六

「酒林」随筆特集 第九十八号

令和元年九月一日発行

発行人 西野 信也

印刷所 株式会社 太陽社

発行所 西野金陵株式会社
高松市紺屋町九番地六号
高松大同生命ビル八階

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。

西野金陵株式会社



■酒類部各事業所

- 〔本店〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔高松本社〕
〒760-8544 香川県高松市紺屋町9番地6 高松大同生命ビル8F ☎087-826-4133
- 〔高松支店〕
〒760-0064 香川県高松市朝日新町33-40 ☎087-851-4133
- 〔土庄営業所〕
〒761-4121 香川県小豆郡土庄町瀨崎甲545-1 ☎0879-62-0101
- 〔丸亀支店〕
〒763-0083 香川県丸亀市土器町北1-70 ☎0877-23-4133
- 〔徳島支店〕
〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-53-4 ☎088-653-4133
- 〔松山支店〕
〒790-0925 愛媛県松山市鷹子町546-1 ☎089-975-4133
- 〔岡山支店〕
〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田錦564-209 ☎086-296-2136
- 〔洲本支店〕
〒656-0012 兵庫県洲本市宇山3-5-28 ☎0799-22-0788
- 〔大阪営業所〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-4133
- 〔東京営業所〕
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F ☎03-5543-4133
- 〔観音寺物流センター〕
〒769-1613 香川県観音寺市大野原町花福1071-1 ☎0875-56-3133
- 〔多度津工場〕
〒764-0028 香川県仲多度郡多度津町葛原1880 ☎0877-33-4133
- 〔琴平工場〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔金陵の郷〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133

■化学品事業部各事業所

- 〔大阪本社〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2444
- 〔大阪支店〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2447
- 〔東京支店〕
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F ☎03-3552-3427
- 〔名古屋支店〕
〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-26-13 ちとせビル5F ☎052-561-5531
- 〔北陸営業所〕
〒918-8231 福井県福井市間屋町3-815 和中ビル1F ☎0776-24-0967
- 〔上海西野貿易有限公司〕
中国上海浦東外高橋保税区基隆路6号 ☎+86-21-6278-9548
- 〔NISHINO KINRYO (THAILAND) CO.,LTD.〕
159/40 Serm-Mitr Tower 26th Fl. Room No. 2606, Sukhumvit 21 (Asoke) Rd. Kwaeng klongtoey-Nua, Khet Wattana, Bangkok 10110 ☎+66-2-661-7014

〔PT. NISHINO KINRYO INDONESIA〕

- Sampoerna Strategic Square South Tower Level 30 Room No.6 Jl. Jend. Sudirman Kav 45-46, Jakarta 12930 INDONESIA ☎+62-21-2993-0822



西野金陵株式会社
四国・琴平